

❖ 文法規則とはどのようなものか

日本の英語教育をめぐるのは、さまざまな議論が交わされています。その中で私たちがよく耳にするのは次のようなテーマです。

- 英会話や英語によるコミュニケーションに十分な時間が費やされていない。
- 生徒たちは文法規則を学ぶのに時間を費やし、現実の状況で生きた英語を使う時間が十分に与えられていない。

しかし、私には、このどちらもの射ていない議論のように思われます。いったい、どこがおかしいのでしょうか？

私の考えでは、言語には、ヨコ方向の軸とタテ方向の軸の2つがあると考えることによって、この「文法規則 対 英会話（コミュニケーション）」という問題を、みなさんが今まで気づかなかった視点から眺めることができるのです。

まず、このような質問があるとしましょう。「文法規則とは何か？」。これでは問い方があまりに漠然的だと思ったら、答えがなるべく具体的になるように、こう変えてみましょう。「文法規則とはどのようなものか？」

教科書は文法規則であふれており、教師はそれらを板書するのに多くの時間を費やす。そして、生徒はその板書をノートに書き写す。こんな状況を思い浮かべれば、上の質問の答え、すなわち、文法規則がどのようなものかを見つけ出すのはたやすいことです。

実際、これらの文法規則を調べ始めると、それらが次のよう

な要素で成り立っていることがわかります。

- 英語のかけら（例：give something to someone）
- 日本語のかけら（英語のかけらが混在することも多い）
（例：give 物 to 人）
- 専門的な文法概念を表すアルファベット（例：SVO）
- 専門的な文法概念を表す漢字（例：分詞構文）
- さまざまな種類の記号（例：+～ing）

実際には、これらはすべて、次のように、組み合わせられて用いられることが多いようです。

- 知覚動詞 + O + 原形 / ～ing

この規則から学習者は、see/notice/hear/feel が次のようなパターンで現れることがわかります。これは、第4章で示したとおりです。

I saw him come/coming.

私は彼がやって来るのが / やって来るところが見えた。

日本の教育制度の中で英語を学んだことのある人には、このような文法規則に何の違和感も感じないでしょう。実際、言語学習をこれ以外の方法で行うなど、かなり難しく、あるいは不可能なことだと思えるかもしれません。

これらの文法規則それ自体には、何も悪いところはありませんし、私も学習者にそれらを学ぶなどとは言いません。事実、私